

中野好夫さんの思いを引き継いで：まずは 知ることから

屋嘉, 宗彦

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

22

(発行年 / Year)

2023-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030078>

中野好夫さんの思いを引き継いで

—— まずは知ることから ——

屋 嘉 宗 彦

飯田泰三さんから研究所の所長を引き継いだのは2009年度だったと思う。沖縄研究についての知識はほとんど無いに等しかったが、飯田さんから「沖縄の人間だからやれ」と言われてやることになった。ただ、その前年の2008年度に、研究所が所蔵する「中野資料」のデジタル化を担当して、新切抜きの膨大なスクラップを撮影する作業に何ヶ月も立ち会った。その時、資料の整備・保存は急務だという思いを強く持ったのと、中野好夫さんが、「東京でも沖縄のことがわかるように」と自腹で膨大な資料を収集した思いに強く打たれた。それが所長を引き受けた理由の大きな部分である。

沖縄のことを広く知ってもらうというところで、まず、手掛けたのは「沖縄映画祭」である。職員の森本季里子さんのアイデアと頑張り、そして映画を制作した監督さんたちの協力のおかげで、戦争、民俗、移民、という三つの分野で20本以上の映画を集めて上映し、関連する講演やシンポジウムを行

なった。盛況だった。久高島のイザイホーの映像を提供して下さった岡田監督から「一度きりのイベントでなく、継続的に」と言われて、「その積りです」と約束しながら、結局、映画祭は一回しか出来なかった。それが反省点である。

次に、法政大学の研究所として、学生たちに沖繩のことや沖繩研究のことを知ってもらうために、「総合講座・沖繩を考える」を同年の授業として開講した。毎週、各分野の研究者を講師に招いて講義してもらった。年間30回近くの講義で30名近い先生方の話を伺った。ただ、初年度は、まず歴史からということで近代史の比屋根照夫さんに飛びこみで相談に行き、比屋根さんと近世史の豊見山和行さん、梅木哲人さんに3回連続の講義をお願いした。比屋根さんと豊見山さんは、毎週沖繩から通ってもらおうという無茶なお願いだった。この総合講座は今日まで継続している。諸先生のご協力のおかげである。私の7年間の所長時代の大部分の時間は、面識もない諸先生に講義を依頼し、教室で学生と一緒にその講義を聞いて勉強し、市谷駅前の居酒屋の懇親会でさらに深く勉強するということが割かれたような気がする。この講座は一般の人にも開放されていて、いつでも50名程度の市民が多い時には800名ほどの学生と一緒に大学で一番大きな「薩埵ホール」で講義を受けた。

沖繩情報の発信ということでは、時宜に応じたシンポジウム等を研究所独自で、あるいは他との共催で開催した。普天間基地返還・辺野古移転問題では、岩波書店と共催で2度シンポジウムを行なった。2009年には、ヨーゼフ・クライナーさんの提唱で薩摩侵攻400年に関わるシンポジウム、

2012年には研究所主催で「復帰」40年のシンポジウムを開いた。「復帰」40年シンポでは、大田昌秀さん、稲嶺恵一さんという歴代知事お二人と、新崎盛暉さん、新川明さんをパネリストとしてお迎えした。さらにこの四人の話をまとめて出版することを企画し、岩波書店の協力も得て、再度、沖縄大学で四人にお集まりいただき討論した上で原稿をまとめ、出版した。

資料整理・保存の面では、伊波普猷手稿ほか貴重文献の保存をアーキビスト大里知子さんの力を借りて実行し、前々から問題であった「楚南家文書」の修復保存も、増田寿男総長の理解を得て、1000万円余の費用をかけて5年がかりで完成させた。沖縄戦後初期占領期の資料であるワトキンス文書も法政大学図書館の理解を得て300万円で購入配架することができた。開架図書のチェックも定期的に言うようにした。沖縄関連の寄贈図書も可能な限り受け入れるようにした。太平洋の島々に関する図書・資料を収集していた太平洋文庫や、上原成信さん、川平朝清さんの個人図書などがある。

研究所の本来の仕事は、研究活動である。研究所発足のころ、外間守善さんを中心に文学、言語、民俗、歴史と多くの分野にわたる研究会が活発に開かれていたことを記録で知った。東京における沖縄研究の一拠点としての活動を活発化する必要があると考えて、研究会活動を呼びかけた。私自身は、沖縄語（那覇語）のネイティブとして、沖縄語勉強会を開いた。法政大学の大学院にいたラドミール・コンベルさんやユリアナさん、その他中国、アメリカなどからの若い研究者が集まった。外人の方が沖縄語の習得に熱心だということも面白いと思った。その後、沖縄民謡に興味を持った人た

ちが沖縄の言葉の勉強に移行してきて、現在はその人たちが沖縄語勉強会の中心である。酒井正子さんの奄美シマウタ研究会も多くの人たちが集まっている。沖縄現代史研究会は、若手・少壮の研究者の集いだが、コロナ禍で中断している。

研究成果の発表という点では、従来からの『沖縄文化研究』『琉球の方言』の発行のほかに、所員、研究員の研究成果を「研究所叢書」として、年1冊のペースで刊行することにした。研究所の直接の成果ではないが、沖文研に関わりを持って研究した若い研究者が近年、次々にその研究成果を論文や著作として発表しつつあり、これも間接的に成果の一部に考えても良いと思う。

創立から50年ということを機に、沖縄文化研究所が今後どのような存在意義を持つべきかということについて、若い世代を中心に、改めて討議する必要があるのではないかと思う。現在の沖縄に身を置くことによって、私たちは何をどの様に見ようとするのか、その様々な視点や視野を見えるようにする討議である。

最後に、50周年記念ということで思い浮かんだ実務的な反省としては、沖文研の活動についての公的な記録を十分に整理してこなかったことがある。議事録や関連文書だけでなく、活動全般についての業務日誌のようなものを公的文書として残していく必要がある。